

< 巡検の記録 >

第 1 学年

志 賀 高 原

(浅井 教 官)

昭和 43 年 7 月 7 日 ~ 9 日

巡検の 1 カ月前に、各自一項目ずつの分担を決め、下調べを行なった。その分担項目は以下の通りである。

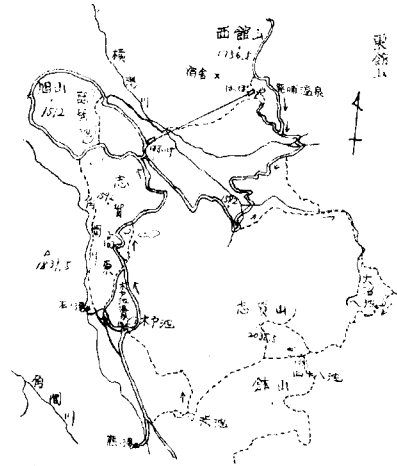
- | | |
|---------------------------|--------------------|
| ① 関東平野西部の地質と地形 | ② 関東平野西部の農業・工業・都市化 |
| ③ 関東山地北部の地質と地形 | ④ 関東山地北部の気候や土地利用 |
| ⑤ 鐮川の河岸段丘とその土地利用 | ⑥ 佐久・上田盆地の地形と土地利用 |
| ⑦ 北信の火山活動・温泉とその利用 | ⑧ 北信の第三紀層と地入り |
| ⑨ 長野盆地の地形と土地利用 | ⑩ 中野扇状地の地形・水と土地利用 |
| ⑪ 志賀高原の気候・土地とその利用 | ⑫ 菅平の気候・土地とその利用 |
| ⑬ 裏日本・表日本気候と家屋・集落・生活などの比較 | |
| ⑭ 信濃川の河川地理学 | ⑮ 群馬・長野の史前史・古代史 |
| ⑯ 群馬・長野の中・近世史 | |

これらが実際に、巡検の下調べになったかどうかは疑問だが、主体的に巡検に参加するという態度を養えたような気がする。

第 1 日目は、午後 3 時にアスマン通風乾湿計、ピュラム式風向風速計、三脚、トランシーバーを携え発哺スキー場の緩斜面へ出かけた。A (1 4 6 0 m)、B (1 5 0 0 m)、C (1 5 5 0 m) 3 つの地点に、5 ~ 6 名配し、乾球、湿球、風向、風速の測定を数回行ない、微気候について調べた。観測値にあまり信憑性がないので、ここに明示するのは避け、気付いたことを述べるに止めたいと思う。観測時刻に差があったためか、高度が低いほど、蒸気圧が低くなってしまった。これは、谷の方から風が吹き上ってきたためであるらしい。これを確かめるために、B 地点で発煙筒をたき、煙の動きを観察した。結果は、谷風がやや卓越していた。

2 日目は、斜面を上ってくる谷風について観測する予定であったが、風が強かったので中止し、志賀高原の地質構造観察のため、池廻りを行なった。志賀高原の地質は、主に次のようなものから構成されている。1). 基盤岩類、2). 基底熔岩、3). 東館熔岩、4). 志賀第一熔岩、5). 志賀湖成層

6). 志賀第二熔岩などであり、その他今の志賀山の噴出物であるテトリタンなども含まれる。池廻りのコースは、地図を参照されたい。大沼池は標高1697mで、土の色は橙色を帯びていた。四十八池の付近は標高1890mで、大小沢山の池沼が散在している。湿地帯なので、珍しい植物がいくつか見られた。熊野湯温泉の小高い展望台から、志賀高原の地形や熔岩の状態などを観察した。



志賀高原略図

最後の日、分担項目を中心に、各自が自由に調査を行なった。(2年 上田 記)

第2学年

彦根・奈良巡検 (渡辺・正井教官)

昭和43年10月10日~13日

〔第一日〕彦根

彦根城のある高台に登って、彦根の位置を確めることから本巡検は始った。琵琶湖のある近江盆地は、東は伊吹・鈴鹿の開析の進んだ断層崖で、琵琶湖との間に湖東平野をつくっている。西は比良の断層崖が湖岸にせまっており、又北も急で、敦賀湾から柳瀬を通して余呉湖に至る柳瀬断層がある。

彦根は湖東平野にあって、湖北・湖南の境となる中央部分に位置している。

地勢観察の後、市内を見学した。市街は井伊氏35万石の城下町で、戦災を免れて、今なお城下町的景観を残している。城を中心にして東南は家臣の武家屋敷で、西南は寺町である。寺町と城の堀の間には、町屋が残っている。町屋には、"うだつ"(防火用の屋外につきでた壁)や格子戸などがみられた。道は原則的には真すぐであるが、外敵の侵入を考慮して鍵手型やゆるやかなカーブの道路が要所要所に設けられている。商店街には、市場商店街、中央街、最近できた新商店街があるが、彦根の特徴としては、駅前の商店街より、町屋の方のそれが繁華街と呼ぶにふさわしいところとなっていることで、駅の吸引力が小さいことを示している。

人口は昭和43年統計で、7.4万人であり、その変化は少しずつであるが増加の傾向にある。

産業別人口は、第1次22%,第2次36%,第3次41%で、工業の比率が高く、繊維工業、機械工業や東部カルスト山地に原料をあおぐセメント工業が行われている。

明治以後、発達の遅れている彦根ではあるが、近年、名神高速道路の開通に伴って、通路にあたる原